

バスケットボール部活動と連携した地域スポーツクラブの設立事例 ～幼児から高校生までを対象としたスポーツクラブの必要性～

An Example of Establishment of a Regional Sports Club in Collaboration with School sports club in basketball ～ Necessity of Sports Clubs for Infants to High School Students ～

赤堀 達也
Tatsuya AKAHORI

旭川大学短期大学部幼児教育学科

Abstract

Due to work style reforms in schools, school sports club activities, which is the primary factor in teachers' long working hours, must change. There is a need to shift to regional sports clubs at the same time as reducing school sports club activity time, but there are many areas where regional sports clubs do not exist, and little progress has been made. Therefore, in this study, we actually established and collaborated with basketball clubs to promote the establishment of regional sports clubs in collaboration with school sports club activities, and investigated what kind of results and issues would be obtained.

When there was no regional sports club, I heard many negative opinions about the school sports club activities of athletes and parents, but after the establishment, there were many positive opinions about both.

It was also found that when establishing the facility, activities targeting a wider range of ages, from infants to high school students, as well as junior high school students are required.

However, as a concern for school staff, there was a strong concern that school sports club activity instructors who concurrently support club activities and regional sports clubs could lead to long-term activities and excessive guidance. It turns out that we need to keep these points in mind.

It is also possible to collaborate with university sports club. I would like to make it a future research topic.

要旨

学校における働き方改革により、教員の長時間労働の一番の要因となっている部活動は変わっていかなくてはならない。部活動時間削減と同時に地域スポーツクラブへの移行が求められているが、地域スポーツクラブが存在しない地域も多く、ほとんど進んでいない。そのためこの研究では、部活動と連携した地域スポーツクラブの設立が促進されるよう、実際にバスケットボールクラブを設立・連携し、どのような成果や課題が出るのか調査した。

地域スポーツクラブがない時は、選手や保護者の部活動に対する否定的な意見を多く聞いていたが、設立後はどちらへも肯定的な意見が多くなった。また設立するには中学生だけでなく、幼児から高校生といった、より幅広い年齢を対象とした活動が求められることもわかった。

ただ学校関係者が抱える懸念としては、部活動指導員が部活動と地域スポーツクラブを兼務する

と、長時間活動や行き過ぎた指導につながる懸念を強く抱いていた。そこも念頭に置く必要があることがわかった。

また大学の部活動と連携していくことも考えられるため、それは今後の研究課題としたい。

I. 初めに

2019年6月19日に発表された「OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2018調査結果」¹⁾によると、前回2013年調査と同様に、日本の教員の仕事時間は参加国中で最も長く、中学校の課外活動(スポーツ・文化活動)の指導時間が特に長いという結果が出た。そのため、中学校の部活動についてこれまでの在り方から変えていく必要がある。スポーツ庁より「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」²⁾も策定されてはいるが、うまく機能していないという現状が浮き彫りとなった。

中学校指導要領³⁾においても「その際、学校や地域の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行い、持続可能な運営体制が整えられるようにするものとする。」とあるものの、地域スポーツクラブと連携した活動はなかなか進んでいない。

そこで、筆者が部活動指導員として配属されていた公立のA中学校男子バスケットボール部(この学校では同好会としているが、部活動と同じであるため部と表記する)の部活動指導員を行いながら、部活動と連携する地域スポーツクラブであるバスケットボールクラブ「Bバスケットボールクラブ」を設立し、部活動指導員とその団体のコーチを兼務して指導を行うことで、部活動を地域に移行するにあたり、何が求められ、どのような問題や課題があるのか調査することとした。

II. A中学校男子バスケットボール部に関わる状況

1. A中学校男子バスケットボール部に部活動指導員が入るに至った背景

筆者が指導に携わるようになった経緯は、それまでいたバスケットボールの専門の顧問が別の学校に移動することになりそこに教員歴2年

目の若手教員が顧問となったが、別種目(格闘技系)の個人競技では素晴らしい実績と情熱や向上心があったものの、バスケットボールに関しては素人であったためである。また前顧問の時に部内で大きなトラブルが発生し、多くの下級生部員が辞める事態となっており、解決してはいたもののチーム全体でわだかまりを抱えたままに顧問を引き継いだこともあり、とても難しく厳しい状況であったことも理由となっている。そこで部員たちへの指導の充実と部内の調和を図るため、また校長としては顧問の負担を減らすため、県リーダーバンクに登録してあった筆者に話が来た。若手顧問との話し合いの末、格闘技出身の顧問がフロアを使用できないときのトレーニングを担当し、専門家である筆者がバスケットボールの技術や戦術的指導を担当するよう分担し、協力して指導を行うことにした。

筆者の指導者資格は、日本スポーツ協会(旧日本体育協会)バスケットボール指導員、JBA協会公認C級コーチ、中学校教諭専修免許状保健体育、高等学校教諭専修免許状保健体育、小学校教諭専修免許状などを取得している。また指導経歴は小学生のスポーツ少年団のコーチ、中学生や大学生の部活動監督兼コーチであり、戦績は小学生の指導では全国準優勝し、大学生の指導でもインカレに出場した。中学生においても公立校最高位となる県ベスト4であった。

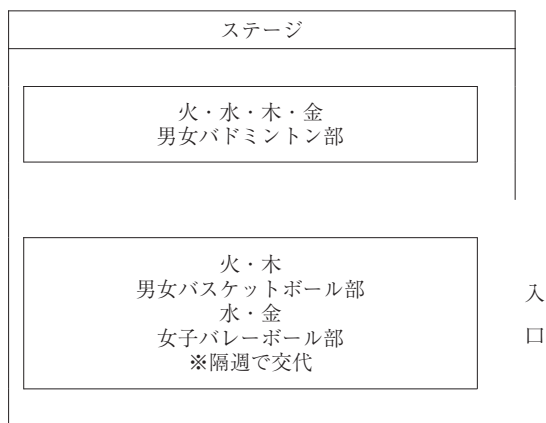
2. A中学校の男子バスケットボール部の活動実態

この中学校では、全ての部活動は月曜日が一斉に休みであり、火曜日から日曜日にかけて活動していた。体育館を使用する部活動は男子バスケットボール部・女子バスケットボール部・男女バドミントン部(男女一緒に活動)・女子バレーボール部である。バスケットボールコートが2面取れるフロアの大きさであるが、男女バ

バスケットボール部活動と連携した地域スポーツクラブの設立事例
～幼児から高校生までを対象としたスポーツクラブの必要性～

ドミントン部は人数が多いため毎日1面を使用し、残りの1面を残りの3部で交代して使用していた。しかし女子バレーボール部が使用する際は競技の性質上1面を使用しなければならなかった。そのため男女バスケットボール部は合わせて1面、つまり半面（バスケットボールコ

ートというハーフコート）ずつ使用することしかできなかった。女子バレーボール部と男女バスケットボール部は一日ごと交互に使用している状況であり、火曜日と木曜日、水曜日と金曜日を隔週で交代しながら使用していた。（図1「平日の体育館の使用状況」参照）



<図1「平日の体育館の使用状況」>

また体育館を使用できない日は、外コートがなかったため、外周やトレーニングを行うしかなかった。そのため平日については体育館内外において、試合の広さを使用することができず、満足な活動できる日がないという状況だった。土日については当初、時間を気にせずに試合用の広さで活動ができたが、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」に合わせて、市の試験校2校に選出され、先駆的に土日の活動はどちらか一日だけに限ることになり、追い打ちをかけるように指導ができなくなっていた。

活動時間は季節によって変わり、終了時間は日没の時間に合わせて市内で統一されていた。夏の遅い時で17:45に活動終了18:00完全下校、冬の早い時で16:30活動終了16:45完全下校となっていた。そのため冬は授業が終わって集まると10分くらいしか活動できないことがある状況だった。簡潔にまとめると以下となる。

①平日、体育館一面を使用できる日がない

- ②外コートが無い
- ③平日の体育館の使用時間が隔週で変わるため、仕事を合わせることが難しい
- ④冬場の活動時間がほとんど無い
- ⑤土日の活動状況について大幅な制限がかかった
- ⑥テスト期間、面談、学校行事などで部活動ができないことが多い

そのため平日は隔週1日、土日のどちらかで1日しか練習に参加することができず、また参加できても活動時間がとても少ないという状況であったため、指導がままならなかった。これらの課題は体育館で行われている部活動なら、どの学校でも多かれ少なかれ抱えている課題である。そのため強いと言われる部活動は小学生のチームがある部活動か、正規の時間以外で活動している部活動であり、現在の部活動の仕組みや時間内で部員を育成していくことはとても困難である状況であると言えるだろう。

3. 地域スポーツクラブ「Bバスケットボールクラブ」を設立するに至った理由

選手からの要望もあり、そして顧問と相談し、保護者の協力を得て、スポーツ庁で掲げている部活動と連携した地域スポーツクラブ「Bバスケットボールクラブ」を設立することにした。その際にはスポーツ庁及び市の教育局学校教育部にアドバイスを求め、校長の指導の下に、下記の事項を遵守して行うこととした。クラブチームとはBバスケットボールクラブのことである。

- ①クラブチームの練習は週1回3時間以内とすること
- ②クラブチームの参加生徒と不参加生徒の格差が生じないよう、学校での練習は全員統一した練習内容を行うとともに、日常の部活動においても差別が生じないよう留意する。
- ③クラブチームの参加対象者は、A中学校男子バスケットボール部生徒のみとせず、他校生や小学生にも広く門戸を開くとともに、そのことを継続的に広報する。
- ④クラブチームの活動には、本校の校長及び男子バスケットボール部の顧問は関わらない。
- ⑤クラブチームの活動にあたり、部の備品・消耗品は使用しない。

そして活動し始めて半年後に地域スポーツクラブに来ている選手たちに、これまでの部活動とクラブの活動について調査した。

4. 地域スポーツクラブの活動状況

2017年2月に試験的に活動を行い、同年4月から継続的かつ本格的に活動を行った。最初1月の段階では中学2年生2人、中学1年生12人、小学3年生1人、全15人でスタートしたが、次年度になり学年が上がると、新入生が多く入団を希望し、中学新1年生14人、転入生の中学新3年生1人、小学6年生2人が入り、30人を超える大所帯となった。入団に関しては強制ではないことを伝え、校長からの指導があった通り、入団しないことで同じ上手さなのに試

合に出られなくなるようなことはないことも伝えた。そして実際に部活動には参加しているが、こちらの地域スポーツクラブに参加していない生徒も3人いた。また高校生（卒業生及びその友人）毎回ではないものの参加し、一緒に活動した。週1回平日18:30～21:00に活動した。夏場、帰宅時間が遅い時は19:00～21:00に行った。平日に行うことができない時には振替として土曜日または日曜日に行った。

大まかな時系列

- ・2017年2月初めての活動を行う
- ・2017年4月から継続活動を行う
- ・2018年11月アンケート調査を行う

Ⅲ. 調査方法

地域スポーツクラブの本格的な活動を半年行った時点の2018年11月に、その選手及び保護者を対象にアンケート(巻末参照)を行った。アンケートは無記名とし、研究倫理に十分に配慮することを説明して行った。

回答者は、当日練習に参加した中学1～2年生の選手18人と中学生の保護者4人とした。中学3年生は部活動を引退し、受験勉強のため不参加であった。小学生は中学校の部活動との比較ができないため対象外とした。不参加の11人は偶然休みだった。

質問項目は、部活動及び地域スポーツクラブのそれぞれの

- (1)「活動日数」について「多い・ちょうどいい・少ない」の3つから1つを選択した。
- (2)「やりがい」について「とても感じる・感じる・どちらでもない・感じない・全然感じない」の5つから1つを選択した。
- (3)「求めること」については記述することとした。
- (4)「地域スポーツクラブを設立して良かったか」について「良かった・どちらでもない・良くなかった」の3つから1つを選択するようにした。

バスケットボール部活動と連携した地域スポーツクラブの設立事例
～幼児から高校生までを対象としたスポーツクラブの必要性～

IV. 調査結果

アンケートの結果は以下ようになった。

表1 「活動日数について」

		多い	ちょうどいい	少ない
部活動	選手	0.0% (0)	66.7% (12)	33.3% (6)
	保護者	0.0% (0)	50.0% (2)	50.0% (2)
	総計	0.0% (0)	63.6% (14)	36.4% (8)
地域スポーツクラブ	選手	0.0% (0)	38.9% (7)	61.1% (11)
	保護者	0.0% (0)	50.0% (2)	50.0% (2)
	総計	0.0% (0)	40.9% (9)	59.1% (13)

※選手18人、保護者4人、総計22人、()は回答した人数

表2 「やりがいについて」

		とても感じる	感じる	どちらでもない	感じない	全然感じない
部活動	選手	50.0% (9)	44.4% (8)	0.0% (0)	5.6% (1)	0.0% (0)
	保護者	0.0% (0)	100.0% (4)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)
	総計	40.9% (9)	54.5% (12)	0.0% (0)	4.5% (1)	0.0% (0)
地域スポーツクラブ	選手	55.6% (10)	44.4% (8)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)
	保護者	50.0% (2)	50.0% (2)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)
	総計	54.5% (12)	45.5% (10)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)

※選手18人、保護者4人、総計22人、()は回答した人数

表3 「求めること (自由記述)」

			記述があった個数
部活動	選手	挨拶・礼儀・マナー・上下関係	8
		協力・チームワーク	5
		勝利・厳しさ	5
		体育館の使用を増やしたい	3
		個人技術の向上	1
		仲間と楽しむ	1
	保護者	規律・上下関係・他者との共存	3
		基礎練習・初心者向き体力づくり	2
		チームプレー	1
		真剣さ	1
地域スポーツクラブ	選手	達成感	1
		上達・個人技術の向上	6
		部活でできないことができる	4
		協力・絆	3
		体育館を使用できる	3
		週2回はほしい	1
	保護者	部活でできない技術面	3
		体育館を使った練習	1
		好きなことに思い切り打ち込む	1

表4 「地域スポーツクラブの設立について」

	良かった	どちらともいえない	良くなかった
選手	100.0% (18)	0.0% (0)	0.0% (0)
保護者	100.0% (4)	0.0% (0)	0.0% (0)
総計	100.0% (22)	0.0% (0)	0.0% (0)

※選手18人、保護者4人、総計22人、()は回答した人数

V. 考察

1. 選手・保護者の視点からみた考察

部活動の活動日について、「ちょうどいい」と感じている選手が全体の3分の2おり、一方で地域スポーツクラブの活動については週1回の活動では「少ない」と思っている選手が6割を超え、全体として地域スポーツクラブのより多い活動を求めている選手が多かった。

やりがいについては、部活動・地域スポーツクラブともに「(やりがいを)感じる」とほとんど全員が回答し、地域スポーツクラブを設立して「良かった」と全員が回答している。

当初、部活動だけで活動していた際には、専門的な指導がなされなかったことや活動時間が満足に取れないことといった部活動に対する不満が選手からも保護者からも数多く耳に入ってきていたが、地域スポーツクラブができることで教育的な意味を持つ部活動と専門指導を受ける地域スポーツクラブとに区別されたという理解が自然となされた様子が見られた。具体的な記述からは、部活動では団体で活動していく際に必要な礼儀・マナー・上下関係・協力といった団体行動での活動方法が求められていることに対して、地域スポーツクラブではそれらに加えて技術面などといった部活動でできないことを欲しており、そしてそれらの指導を受けている実感がしっかりとできていたことがわかった。

指導者側としては、それまでは平日にほぼ参加することができなかった部活動に、確実に1日は地域スポーツクラブの活動として指導できるため、それだけでも以前に比べて技能や技術そして戦術等が定着したと感じた。この中学校区は男子のミニバスのチームがなく、過去20年において、この男子バスケットボール部は1度

しか市大会を突破したことがない男子バスケットボール不毛の地あったが、この年は区大会で3位に入ったり、市大会準優勝・県大会5位になったチームを倒したりしていることから、指導が定着してきていることが裏付けられた。

以上の理由により部活動と連携した地域スポーツクラブの活動は、部活動にとってもそして地域スポーツクラブにとっても、また選手・保護者にとっても部活動指導員にとっても良い方向に進んでいく可能性が高いことがわかった。そのためスポーツ庁が打ち出している「部活動と地域のスポーツクラブとの連携」という方向性を強く打ち出していくことが望ましいことが分かった。

2. 部活動指導員の視点からみた課題と展望

学校における働き方改革により、部活動の時間を削減していくことは、もはや必然のこととなっている。ただ、学校における働き方改革は「学校における働き方改革に係る緊急提言」⁴⁾により、教員が「教育の質を高められる環境を構築する」ために即急に進められるべきであるが、部活動については時間を削減するだけでは、部活動教育の質を高めることに至ることはない。そのため部活動の時間削減を進めると同時に、地域スポーツクラブの設立及び連携も早急に進めていくことが求められるが、今回設立・運営してみて課題も見つかった。その課題は以下の3つである。

- ①部活動指導員による設立が難しいこと
- ②部活動指導員による行き過ぎた指導や長時間の活動につながる懸念があること
- ③部活動指導員の確保が難しいこと

バスケットボール部活動と連携した地域スポーツクラブの設立事例 ～幼児から高校生までを対象としたスポーツクラブの必要性～

この市では以前に、他校の他競技で、学校外の練習場に基盤を置いて活動している団体により日常的に外部指導者（部活動指導員としての資格を所持していたかわからないため部活動指導員ではなく外部指導者とする）による体罰が行われていたことが問題となったことがあった。そのようなことが繰り返されることのないよう、校長と半年以上に渡り話し合い、またスポーツ庁の担当者や市教育局学校教育部の担当者にも何度もアドバイスをいただき、Ⅱ-2で取り決めた5つの事項を遵守することで地域スポーツクラブを設立した経緯があり、とても労力と時間がかかった。確かにそのような行き過ぎた指導や長時間の活動は排除されるべきである。しかし地域スポーツクラブがいくつかできると、そのような指導をしている地域スポーツクラブは選手が集まらなくなり立ち行かなくなるため自然と解決されることが考えられる。そのため設立しにくくするのではなく、設立しやすくしていくことの方が大切であると考えられる。スポーツ庁により、より具体的な文言で学校現場や地域社会に下していくことが必要だとわかった。学校現場に下していくことは紛れもなく大切なことであるが、地域社会にも下していくことが必要な理由としては、部活動指導員の確保の問題にもつながるからである。地域社会において部活動指導を行いたい人はおり、ある程度時間の都合がつく人もいる。それは「自分の子どもがいる間だけは指導のお手伝いをする」という人が一定数いることからわかる。しかしその人たちが部活動指導員として定着しない理由として、ボランティア精神に依頼してしまっていることであろう。そこが解決できれば部活動指導員の確保ができていくと考えられる。

そこで今後の展望として、その解決策を2つ考察してみた。

1つ目は、幼児から高校生までを対象とした地域スポーツクラブの設立を考えると良い可能性がある。今回のBバスケットボールクラブでは、入団していた選手は中学生と近隣のミニバスに入っている小学校高学年とある程度限定し

たものだった。それは中学生の部活動と連携するという意向と、小さいコート1面しか会場をとることができなかったためである。しかし卒業生や近隣の高校生が何度も参加し、練習相手となって来ていた。その高校生は、高校でも続けているがまだ下級生であるため試合に出られず練習をがんばりたい人、高校3年生で部活動を引退した人、中学時代はバスケットボール部に入っていたが高校では辞めてしまった人、など様々であり、高校生にもニーズがあることがわかった。また女子中学生も入りたいという要望があった。そして初心者の小学生も入りたいという要望もあった。それ以外にも入部している選手の小学校低学年や保育園の弟妹も送り迎えで再三に渡り顔を出しており、練習前後のコートが空いている時間に遊んでいる姿が見られた。様々な時間帯の活動が可能となれば、それらの子どもたちを対象に活動できる可能性が大いに見られた。そうすればボランティア程度の金額ではなく対価に見合った報酬とすることができる。今回は、部活動指導員である筆者は指導料等をいただかず、保護者が月500円で備品を揃えるための費用を回収・管理していただいた。従来の部活動指導員が自ら地域スポーツクラブを立ち上げて月謝をいただくのは、本人も保護者も抵抗があると考えられる。そのため自治体で相談窓口などを設け、主導したり、設立の手助けをしたりしていき、ボランティア精神に頼らない持続可能な地域スポーツクラブを設立していく必要があるのではないだろうか。

2つ目は、大学（特に教員養成課程や教職資格を取得できる大学）の部活動などと連携することである。大学生にとっては指導体験の場として、中学生にとってはより高いレベルで練習を積む場として双方にとって利益が出る可能性がある。そのためこの点については今後の研究課題としていきたい。

部活動と連携した地域スポーツクラブが求められているがなかなか進んでいない。このままではまた上手くいかずに、地域スポーツクラブへの移行は途切れてしまいそうである。そうならないような行政の仕掛けが大切だと感じた。

現在は部活動の時間削減だけが進んでいる状況で、部活動をがんばりたい子どもたちは行き場をなくしている。早急な対応をしていく必要が求められている。

参考資料「部活動・社会体育クラブに関するアンケート」

VI. 最後に

地域スポーツクラブを設立するにあたり校長との面談に何度も足を運び協力していただいたBバスケットボールクラブの4人の保護者の方、そして地域スポーツクラブで共に活動していただいた選手及び保護者の方、学校男子バスケットボール部顧問をはじめ校長及び学校関係者の方、またアドバイスいただいたスポーツ庁の担当者及び市教育局学校教育部の方に深く御礼申し上げます。

<引用文献・参考文献>

- 1) 文部科学省「OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2018調査結果」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afielddfile/2019/06/19/1418199_1.pdf、2019年6月25日閲覧
- 2) スポーツ庁「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afielddfile/2018/03/19/1402624_1.pdf、2019年7月10日閲覧
- 3) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年3月告示)」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielddfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf、2019年7月10日閲覧
- 4) 中央教育審議会初等中等教育分科会 学校における働き方改革特別部会
「学校における働き方改革に係る緊急提言」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/_icsFiles/afielddfile/2017/09/04/1395249_1.pdf、2019年7月11日閲覧

バスケットボール部活動と連携した地域スポーツクラブの設立事例
～幼児から高校生までを対象としたスポーツクラブの必要性～

参考資料「部活動・社会体育クラブに関するアンケート」

※ここでは地域スポーツクラブではなく社会体育クラブとした。

<部活動・社会体育クラブに関するアンケート>

1. あなたは選手ですか？それとも保護者ですか？ 保護者 ・ 選手 _____年生

2. 部活動の日数についてはどう感じていますか？

多い ・ 少ない ・ ちょうどいい

3. 部活動に求めることは何ですか？

4. 部活動にやりがいを感じていますか？

とても感じる ・ 感じる ・ どちらでもない ・ 感じない ・ 全然感じない

5. 社会体育クラブの日数についてはどう感じていますか？

多い ・ 少ない ・ ちょうどいい

6. 社会体育クラブに求めることは何ですか？

7. 社会体育クラブを設立して良かったですか？

良かった ・ 良くなかった ・ どちらでもない

8. 社会体育クラブにやりがいを感じていますか？

とても感じる ・ 感じる ・ どちらでもない ・ 感じない ・ 全然感じない

9. 社会体育クラブを設立してどのように変わりましたか？